

新たな冒険の始まり——愛知県立芸術大学での留学生活

洪慈萱 国立台南芸術大学民族音楽学研究所（特別聴講学生）

1. はじめに

2年前から待っていた留学生活がやっと始まった。自分一人で海外に行って、今まで分からなかったところで生活するなんて、私には大変なチャレンジだと思った。実際に日本で暮らし始めると、留学生活は想像と違うところもあるし、面白いこともたくさんある。そのため、この1年間体験したことについて記録を残したいと思う。

2. 学校での生活と勉強

新学期が始まったばかりの時、台南芸大で授業を受けるのと何が違うのかだんだん気づいた。一番違うのは授業の時間である。台南芸大の大学院では、基本的に一つの授業につき3時間がかかる。ここでの授業は半分の時間、つまり1時間半かかる。そのため、興味がある授業がもっと受けられる気がする。授業や音楽学コロキウムが終わったら提出する紙、いわゆるコメントシートを書くのも台湾ではあまり見ないやり方で私にとって新鮮なものである。台湾では授業やシンポジウムなどが終わったら、先生や司会者は直接学生たちに意見を聞くことが多い。人前で話すのが苦手な私にとって、コメントシートを書くのは、日本語の書き方の練習だけではなく、自分の感想をはっきり伝えることである。そして、コメントシートを書きながら、授業中何が勉強になったかも思いつける。

もともと民族音楽学の学生の私にとって、音楽研究科は新しい分野なので、今までよく分からなかった西洋音楽に関する学科の勉強を始めた。新しい知識を得ながら日本語の能力を身につけるように頑張った。チューターの村瀬さんのおかげで、どんどん日本語で喋ることができて、文章を書けるようになった。時々、授業で発表する機会がある。最初、自分の研究しているテーマを日本語で紹介するのは大変そうだったと思うが、少しずつできるようになった。

受けた授業は音楽の知識についての勉強だけではなく、実際に楽器の演奏をすることもある。日本に来る前に、台南芸大でワールドミュージックアンサンブルに参加してお箏を弾き始めたが、先生の教え方は日本と違うのかということを知るため、また楽器を触り続けるために、「日本音楽演習」でお箏の演奏を学んだ。担当の野村祐子先生は名古屋で有名な箏曲家なので、一流の箏曲家に習えるのは外国人の私にとって珍しい機会だと思う。



図1 「日本音楽演習」でのお箏の発表会
『六段の調べ』の一段を弾きました

3. 初めての学祭

日本の学校生活といえば、文化祭が一番大事なイベントという印象が強い。2022年11月、3年ぶりの愛芸祭が開催された。台湾では文化祭と似ているイベントもあるが、主に学校の創立のお祝いなので、雰囲気は全然違う。愛芸祭は3日間で行われて、学生たちは自分で色々なお店を建てる。グルメのお店はもちろんあって、自分の作品を売っているお店も沢山ある。美術学部の学生が描いた絵も展示していた。売店だけではなく、舞台での様々なパフォーマンスも行われていた。その中で最も面白いと思うのはコスプレ大会。自分の想像とは違って、アニメキャラクターのコスプレではなく、日常生活で現れるものを真似していた。そして、音楽学部管打楽器コースの演奏会も鑑賞した。普通の演奏会ではなく、みんな本気でキャラクターのコスプレをして演奏した。本当にすごいパフォーマンスだ。管打楽器コースのラーメン屋も人気だったが、並んで待つ人が多すぎて結局食べられなかったのは残念だ。3日間の多様なイベントに参加して、学生たちの行動力に驚いた。学祭は学生の本番なので、先生が関わることはほぼないということがよく分かった。初めての学祭はとても楽しかった。

4. 学外での勉強

日本のポピュラー音楽だけではなく、民族音楽と伝統芸能にも関心があるので、実際に公演を観に行きたいとずっと思っていた。「ポピュラー音楽概論」、「日

本音楽史概説」など音楽について授業を受けたが、見られるのはただ文字や画面上の説明だけである。教科書の知識を勉強するより、実際に観に行った方が印象が強く残ると思う。そのため、興味がある公演の情報を調べて、チケットを手に入れて、公演の会場に訪れた。伝統的な舞台芸能の歌舞伎、能、文楽、三味線、お箏の演奏会や、現代のパフォーマンス、例えば歌手のコンサート、2.5次元ミュージカル、アニメ作品をテーマとして行われたオーケストラコンサートなど、色々な形を見ると、日本の音楽の豊かさをよく感じた。しかし、多くの音楽を認識するほど、まだ知らないことが多いと感じた。

私が研究対象としている2.5次元ミュージカルは、漫画、アニメ、ゲームなど2次元のコンテンツを原作として作られる3次元の舞台エンターテインメントである。日本だけではなく、この数年間、台湾でも2.5次元ミュージカルの人気が増えてきた。しかし、生で見るとは海外に住んでいる人には難しいので、日本に来る前は、ネット配信だけで2.5次元ミュージカルを観ていた。ライブという形式は、現場で雰囲気を感じるのも大事な体験だ。せっかく日本に来たから、できるだけ公演を鑑賞する機会を逃さないよう生で観に行った。実際に劇場に行って、好きなキャラクターが目の前に現れた瞬間、すごく感動した。何より、2.5次元ミュージカルを深く理解できるようになった気がする。

音楽の知識を身につけることだけではなく、日本語の勉強をすることも続けた。毎週土曜日、長久手市文化の家で外国人向けの日本語教室に参加していた。様々な国の人と日本語で話しながら、ボランティアの先生から日本語や日本での生活についての知識を勉強した。12月に、教室で行われた発表会で、自分の国の話をみんなに紹介した。自分だけではなく、他の国からの人々も日本語の勉強のために頑張っている姿を見ると非常に励まされた。



図2 様々な国の人が集まっていた
日本語教室で行われた発表会

5. 旅行の楽しみ

旅行中きっと何か勉強になることがある。日本に留学する前に、日本に来た

ことは3回あったが、あの時自分は日本語が分からなかったの、日本語が分かる友人と一緒に旅行していた。一人で日本での旅行なんて、最初あまり想像できなかったが、チャレンジしてみるとだんだん難しくなくなった。留学生生活を始めたばかりの時、昔行ったことがあるところから一人で行ったが、もっと遠いところへ旅行したいという気持ちがだんだん浮かんできた。そのため、夏休みの間、香川県で3年に一度行われる瀬戸内国際芸術祭に参加した。香川県は台湾で人気の観光スポットとは言えないが、色々な作品を見ながら島々を巡り、海が好きな私は満喫した。冬休みには、行ったことがない九州を訪れた。大分県日田市は観光客が少ないが、漫画「進撃の巨人」の作者である諫山創先生の故郷なので、聖地巡礼として行った。憧れていたシーンを見ると、自分にとって「旅行の意義」は何かとわかった（台湾歌手の陳綺貞の歌『旅行の意義』はSNSに旅行の話を投稿するときよく使われているハッシュタグである）。



図3 大分県日田市大山ダムの「進撃の巨人」の銅像
(左:アルミン、中:エレン、右:ミカサ)

6. 終わりに

自分の国から離れて、異国で暮らして、新しい生活を体験しながら日本の文化を少しずつ理解するようになった。慣れるところもあるし、慣れないところもあっても、自分には大切な経験である。国々の文化的な違いを味わうのも面白いと思う。季節の変化とか、食べ物の味とか、日常生活で色々な違いを観察して体験することは短期間の旅行では難しく、長期間の生活を通じてしか分からないことである。ここで出会った皆さま、この1年ほどの間、本当にお世話になった。いつかまたどこかで出会えますようにと心から願う。